

スーパー耐久レース(2025年7月時点)

■スーパー耐久レースとは

- ・市販量販車をベースとした日本発祥、**日本最大級**の初心者も経験者も楽しめる**参加型レース**。
- ・ハコ車レースの中でも、レース専用設計としてクルマを製作する『スーパーGT』と違い、『スーパー耐久』のクラスの多くは、市販量産車ベースで改造範囲も制限されているため、自ら車両を製作する**プライベーターといわれるチームも多く参戦**、ドライバーも**アマチュアからトッププロまで**幅広い選手が出場する。
- ・複数ドライバーが交代して、決められた時間内で、どれだけ長い距離を走れるか競うレースであり、**速さだけでなく、信頼性や燃費、タイヤ戦略など様々な要素**が勝敗を分ける。
- ・クルマの限界も試されるため**自動車メーカーも開発に役立てる目的で参戦**している。中でも**「富士24時間」は国内唯一の24時間レース**であり、年に1度のモータースポーツのお祭りとしてファンにも人気がある。

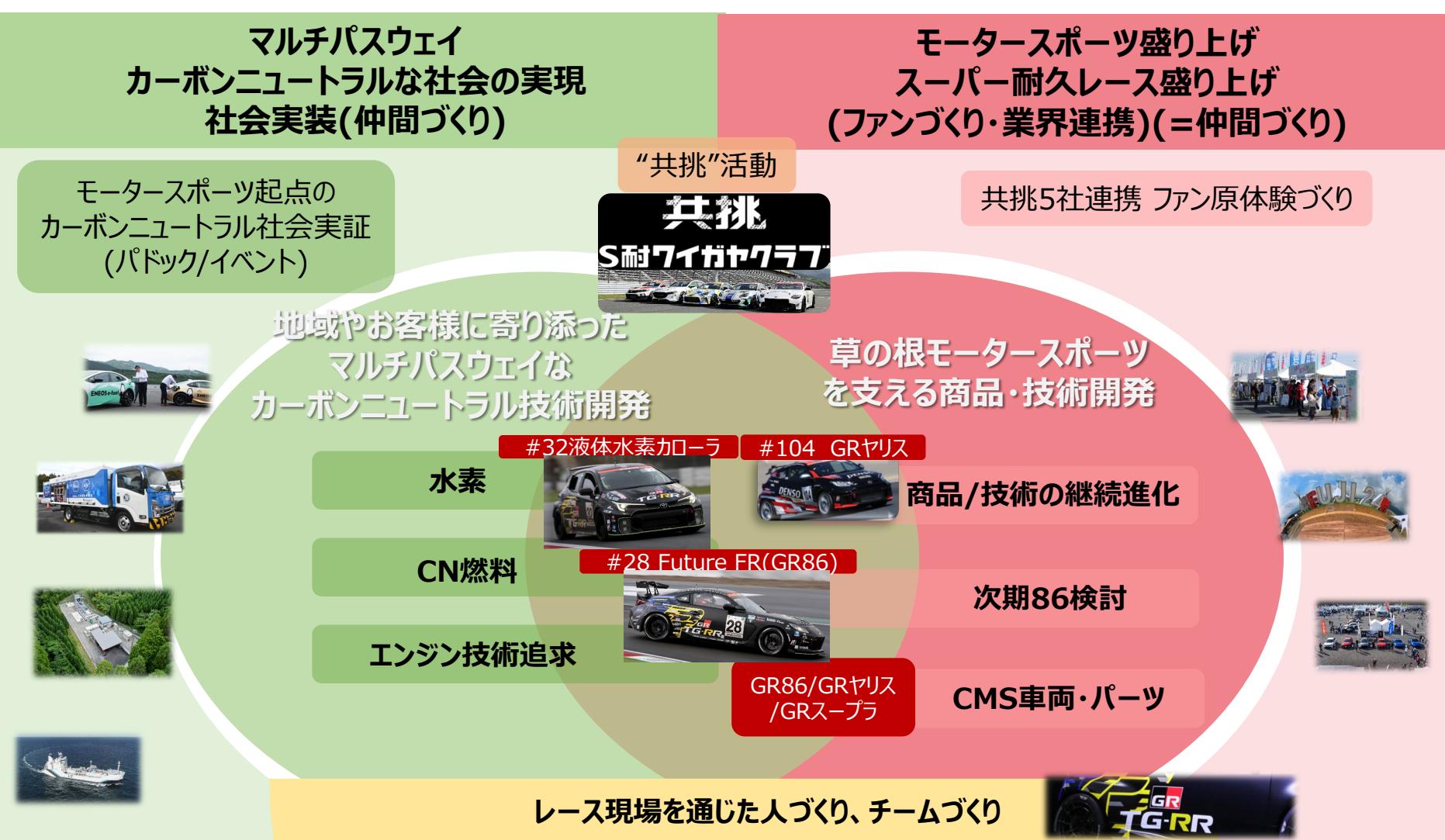


S耐の歴史

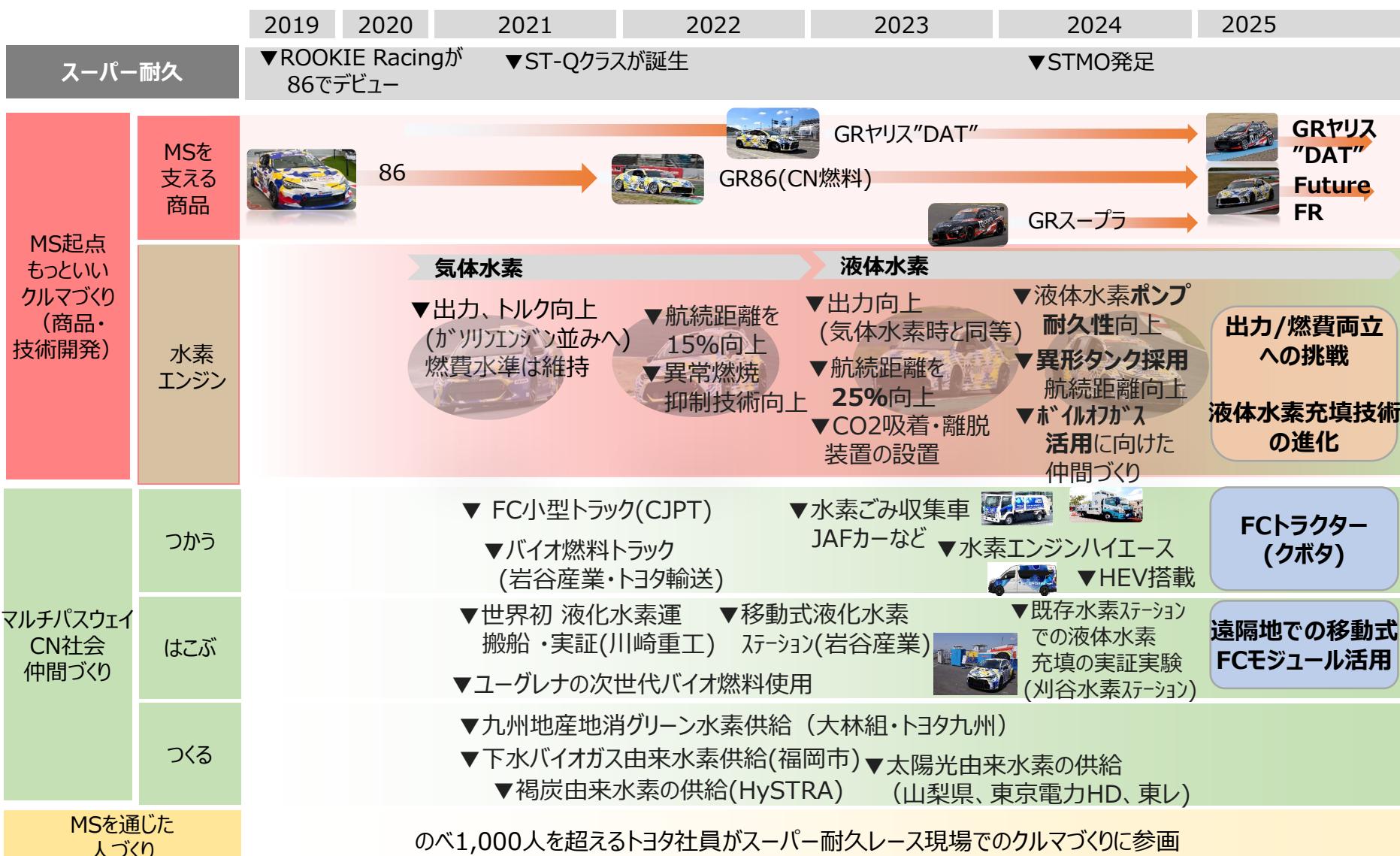
年	出来事
1990	各地で開催されていたN1車両(ナンバーなしのツーリングカー車両で改造範囲が最小限)による耐久レースを、"プレシーズン"としてシリーズ化したことが始まり
1991	「N1耐久シリーズ」(N耐)として正式にスタート
1995	N耐のルール変更でN1規定から外れたこともあり、「スーパーN1耐久シリーズ」と名称を変更
1998	市販のエアロパーツの装着も認めるなどして「スーパー耐久シリーズ」(S耐)と名称を改変 以降、世界的にも珍しく30年以上続くシリーズへと成長
2021	ST-Qクラス新設 他のクラスに該当しないSTOが認めた開発車両が走行可能になり、以後広がりを見せる
2024	スーパー耐久機構(STO)が、新法人である一般社団法人スーパー耐久未来機構(STMO)に事業を承継。 6月より新体制でスタート予定

トヨタにおけるスーパー耐久レース参戦の意義

▼極限の状況で人・クルマを鍛え、“もっといいクルマづくり”および
“カーボンニュートラルに向けた新技術との開発”を、仲間とともに加速



(これまでのスーパー耐久での取り組み)



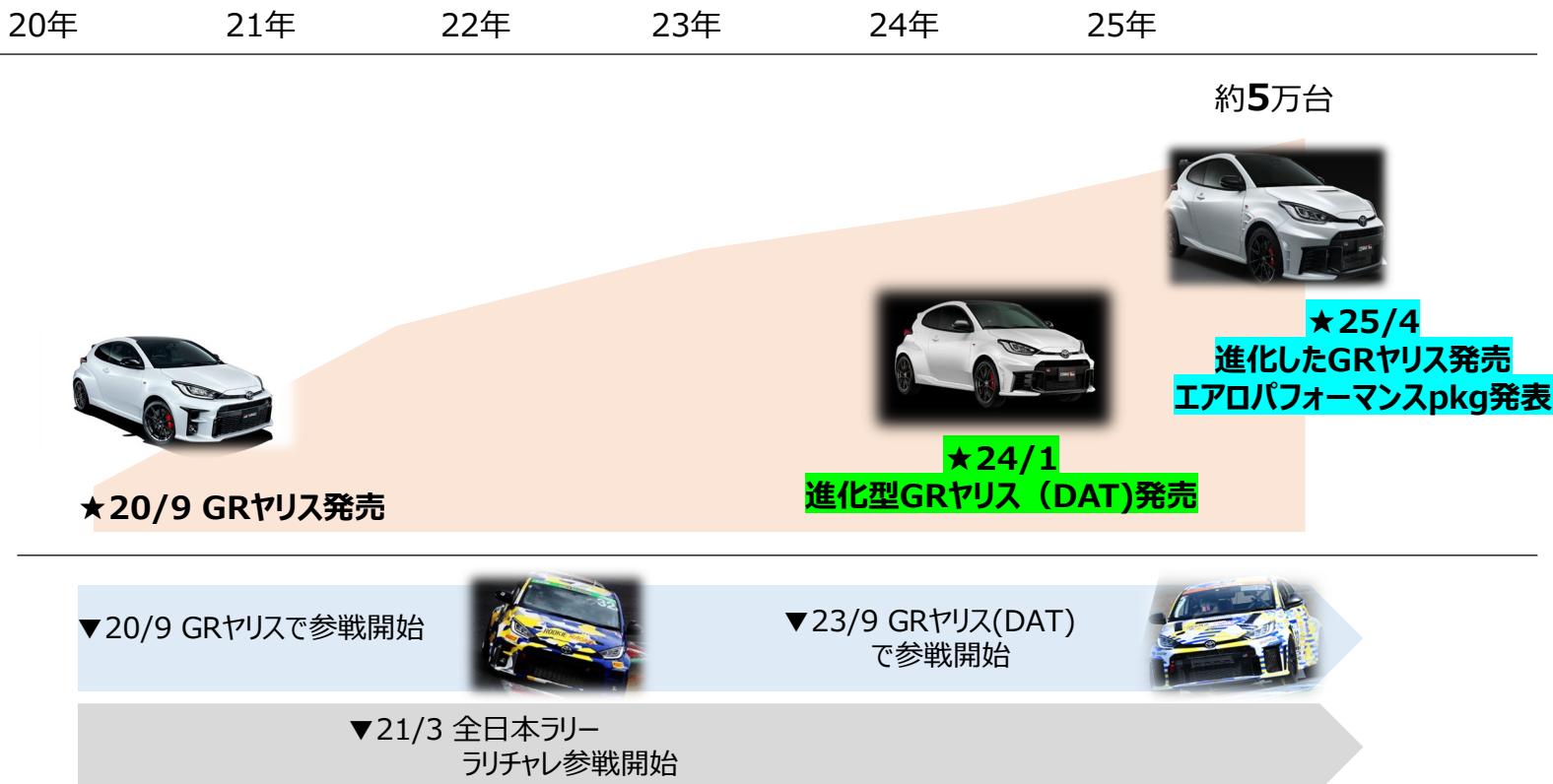
スーパー耐久レースで鍛えたことで市販化につながった事例

<GRヤリスへのフィードバック>

・20年9月に発売したGRヤリスは、同月のスーパー耐富士24時間レースにいきなり参戦。

発売はあくまでも出発点として、「走る壊す直す」ことによるGRヤリスの進化はここから始まった。

・スーパー耐久レースをはじめとしたモータースポーツ現場からのフィードバックを市販車にタイムリーに織り込み進化を続けることで、お客様に選んでいただき、販売実績は累計5万台を上回る。



車名	強化内容(例)	S耐からの反映ポイント
進化型GRヤリス ('24/1)	・GR-DAT	・ATの開発は「熱」が大きな課題となり、特にS耐ではモリゾウがアタック中にコース上で停止してしまうトラブル発生 ⇒空冷ATFクーラーを搭載するなど、冷却性能を高めた
	・ドライバーコックピット	・S耐参戦車をモチーフに、操作パネルとディスプレイを15度傾けて設置することにより、視認性と操作性を向上
GRヤリス エアロパフォーマンスPKG ('25/秋)	・フロントリップスポイラー	S耐で学んだ高次元の空力バランスを実現するために、車両前部に対して発生する持ち上がる力を抑え、フロントの接地感と空力バランスを高め、車両のトータルリフトバランスを向上
	・燃料タンクアンダーカバー	S耐車両の安全燃料タンクの下部をフラット形状にするアイデアを採用。ボディ下部の空気の流れを最適化し、空力性能を高める
	・リアバンパーダクト	S耐で空力負荷により、リアバンパーが外れたことを起点に、開発